

## 第8回県政ひざづめ談議概要

○開催日時：平成20年7月8日 16:00～

○開催場所：南アルプス市ふれあい情報館

〔司会〕

皆様、お待たせいたしました。ただいまから『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。私、今日の進行役をさせていただきます県の広聴広報課長、田中でございます。ご協力よろしくお願いいたします。

では、始めに横内知事からあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

皆さんこんにちは。

今日は皆さんそれぞれお忙しいところ、このひざづめ談議に参加していただきまして本当にありがとうございます。

皆様方の活躍振りを資料で見させていただきましたけれども、それぞれ果物の生産や、あるいは農産物の加工とか、そういう分野で大変に高い技術をお持ちになって、それぞれ活躍をし、この地域の発展のためにご貢献をいただいている方々でありまして、今日はそういう皆さんとお話をできるのを楽しみにしているところでございます。

県としても色々な振興策を取っているわけでありましてけれども、そういうものが果たして有効に働いているかどうか、実際こうやってさまざまな活動をしておられる皆さん方から是非承りたいというふうに思っております。

このひざづめ談議は、ざっくばらんに日頃色々とお考えになっていることを何でも遠慮なく、忌憚なくお話をいただきたいというものであります。そのことがまた我々にとっても役に立つわけでありまして、決してきれい事をおっしゃらずに率直なご意見をお聞かせいただきたいというふうに思っております。そんなことで、今日は有意義な会合になりますようによろしくお願い申し上げます。

〔司会〕

それでは本日出席しております県と南アルプス市の担当者を紹介させていただきます。

まず、果樹の振興対策を担当しております、県の齋藤果樹食品流通課長でございます。

それから、農業の担い手対策などを担当しております西島農業技術課長でございます。

市で農業や産業の振興などを担当しております穂坂農林商工部長でございます。

本日は果樹の振興などに取り組んでおられる皆様と、「南アルプス産果樹のブランド化に向けて」ということをテーマに、果樹のブランド化をさらに高めていくために、どのように産地のイメージアップを図り、それから品種を改良して販路拡大をどういうふうに進めていくか、こういうような観点で話を進めていきたいと思っております。是非忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。

それではどうぞお願いします。

〔知事〕

ここに並んでおりますけれども、誠にこれは質が高いものですね、こうやって見ましても。桃は玉が大きいし、これは李王（りおう）って言うんですか、このスモモは。

〔参加者〕

そうです。

〔知事〕

李王と言うんですね。あと色々な加工品がたくさんあって、それぞれなかなか上品な感じで、都会の皆さんに非常に好かれそうなもので、やっぱり南アルプスのこういった活動というのは相当進んでいるんじゃないかなという感じがしますね。そういう中で、また一つ色々ご意見もありましょうから、是非お聞かせいただきたいと思います。

〔参加者〕

今日はこういう機会を与えていただきましてありがとうございます。

今回は果樹ブランド化ということが主題ということで、その話になるとちょっと長くなっちゃいそうなものですから。私は実は国立公園南アルプスの入口の芦安で客商売というか、温泉宿をもう16年ほど経営しています。ご存知のように、広河原までのアクセスが非常に問題になっています。やっとここで主要工事が終わりました、時間規制等がなくなりまして、県のご協力をいただきまして、いい形で将来が見えてきたなという気がしています。

そんな中で、この観光振興について一言お話をさせていただきたいんですが、実は今、芦安の観光振興の状況というのは余りいい状況ではないです。もちろんアクセス頼みになっているという観光の現状もあるんですけども。

とにかく芦安という所は南アルプスの玄関口と言われながら、来たお客さんに「南アルプスはどこですか」と言われた時、全く分からないわけなんですね。じゃあどうするかというと、釜無川まで下がって下さいという、そんな実情です。それについては16年間ずっとお願いするなり、いろんな所でいろんな意見を言ってきたんですけども一向によくないんです。今の状況はとにかく奥に入れないと。入る期間が、特に上高地などに比べると圧倒的にまだ短い。一番いい時、新緑の時期だとか、紅葉の時期にはまだ入れない。せっかく直っているのにまだ入れないという。まあ危険な状況もあるんで何とも言いがたいんですが、そういった中で少しでも入れる期間を長くしたい。

今は、せっかくの観光資源である南アルプスが、一年の内の3分の1しか生かされていないというのが現実です。残りの3分の2を何とか生かせるだけで、南アルプスの観光というのは非常に良くなる。

全国の国立公園を比較すると、28あるうち、南アルプスというのは、入込観光客が下から3番目なんですね。一番下から3番目で、桁違いに少ないのが現状です。

いろんな交通規制等で自然を守るというのは分かるんですけども、もうちょっと南アルプスの国立公園の観光資源を生かすような行政を考えていただきたい。

その一つとしては、やっぱり冬場の、冬期閉鎖をしている時にできるだけ南アルプスが見えるような、御野立所（おのたちじょ）っていい所があるんですけども、せめてそこま

では入れるように。今はもう閉める道路管理しかしていませんよね。

何か怖ければ閉めちゃえばそれでいいという、そういう感覚で、まあこんな言い方をしたら失礼ですけども、県の林務行政に対して非常に不満を持っています。もうちょっと前向きに、少しでも見せてあげたい。特におじいさん、おばあさん、あるいはおなかの大きいお母さんなんかは、山に登れ、夜叉神峠に登れって言っても無理ですよ。

それはやっぱり、ちゃんとそういうお膳立をしてあげるのが本来の観光であって、それは観光で自然を崩すということでは決してないはずだと。是非そういった南アルプスの観光、夜叉神峠奥の観光、手付かずの観光を、もっと生かすような行政を是非お願いしたい。以上でございます。

〔知事〕

おっしゃることがよく分かりますね。6月から11月まで、今年は11月に入って1週間かな、10日ぐらいかな、そうは言っても3分の1ですよ。だから南アルプスの入り込みといたら少なくても、小笠原国立公園と同じぐらいなんて。確かに御野立所まで行ければいいんですが、駐車場の問題だとか色々あるんですよ。

〔参加者〕

僕は歩いて行ってもいいと思うんです、今の段階だったら。だから夜叉神峠まで車で行って、そこまでのアクセスさえ確保してもらって、あと歩けるように管理していただければもう十分お客さんは入っていける・・・。

〔知事〕

夜叉神のこっちのほうにでも広い駐車場ができてね、だけどやっぱり冬は凍結するでしょうね。上まで。

〔参加者〕

けどそこはもう年間開いているという前提でやっていますから、閉まるのは夜叉神峠から奥ですから。

〔知事〕

上までは冬でも行けるんですか。

〔参加者〕

行けるようにしてもらっていますが、最近は、ちょっと雪が降ると閉まるようになっています。

〔知事〕

御野立所まで行けるといいですね。

〔参加者〕

是非行けるように。

〔知事〕

まあトンネルは入ってもらおうとしてね。

〔参加者〕

ただ冬場非常に冷えるということで、下が凍ったりして危険だというのは確かにあるんですけども、それを通し易くするというのが管理であって、やっぱり本当の意味の管理をしていただきたい。

〔知事〕

そうですね、冬場ね。検討してみますよ。

〔参加者〕

よろしく願います。期待しております。すみませんでした。

〔知事〕

いかがでございましょう。今、観光の問題です。確かに、しかし本当言ってみると見えないから困るんですよね、全く。

〔参加者〕

情けないですよ、今の状況では。

〔参加者〕

今の関連ですけど、私どもの商工会でも南アルプス温泉ロッジを3年前から指定管理者制度でやっています、いろんなお客さんの意見を聞いてみますと、どうしてもあそこに泊まったお客さんが見たいと言うんですね、南アルプスの連峰を見たいと。

だけど今の話ですと、やっぱり夜叉神峠まで行かないと見られないんですね。あとは開国橋まで行って見て下さいと、こういう話になるわけです。御野立所まで、今歩いてでもという話が出ましたけれども、あそこは駐車場なんか不備で、ちょっとありませんので、私たちが提案しているのはマイクロバスのシャトル便でいいと。ただ行って、あそこで見て、そして帰ってくるということになりますと、交通安全面でも規制が守られますし、お客さんも、交通費というのを500円なり、1000円なり払っても見たいと言うんですね。だけどこれが完全にクローズされていると行けないということなので、是非何とか。冬期の間も見ただけで結構なんです。御野立所まで行って、ちょうど時間が30分あれば行って帰ってこられますので、あそこに10分ぐらい、御野立所のところに行って、そして帰ってくるような形にすれば、十分南アルプスに来たということが言えるんじゃないかと思しますので、よろしく願います。

〔知事〕

まあ事故の心配ですよ。事故の心配。そこが大丈夫かどうかね。

〔参加者〕

ですから専門のタクシーとかバスのほうがいいと思うんですね。あそこでちょうどUターンする場所がありますのでね。そんなことで是非関連ですけど、よろしく一つお願いいたします。

〔知事〕

検討してみます。分かりました。しかし、市から余りそんな話は来ないけれども・・・。どうなんですか、市には話をしているんですか。

〔参加者〕

市にはもちろんしています、かなりしています。

〔参加者〕

市長からはお願いしていると思うんですが・・・。

〔知事〕

そうですか。

〔参加者〕

今度は本題へ。

〔知事〕

これは素晴らしい、これは白根白桃、白鳳ですか。

〔参加者〕

いえこれは「アルプス小町」です。ちょうど2年ほど前に、当時の石川市長に命名していただきました。当地区のオリジナル品種です。今日持って来たものは特にその中でも厳選した、糖度も14度以上のかなりいい物だと思います。

県の先生方の言うことなんですけど、山梨県の桃というのはまず早生の日川白鳳で、次に出る白鳳との谷間がどうしても埋められなかった。これは知事も去年東京に行ってお話を聞いていると思うんですけど、そこをどうするかということで、試験場に「夢しずく」という新しい品種を出してもらって、かなり大きい期待をしているところなんです。しかし、私どもこま野地区においては、サクランボもその前の6月に出荷があります。作業性からいって、夢しずくというのは袋を掛けなければいけない、受粉作業しなければいけないということで、その部分がどうしても手をかけきれなくなると。

このアルプス小町というのは、要するに授粉もしなくて結構、自分で自家受粉をしますよ、有袋、袋も掛けなくていいですよ、十分着色はしますよ、という利点があります。し

かも玉も大きくて、あかつき系統ですから非常に品質もいい、こんなふうなことなので、今私どもこま野農協管内はこれを主体で行こうということで、実は昨日も東京の太田の市場に行って試食宣伝会をしてきました。非常に高い評価を得ているんですが、やはりああいうマンモス市場からすると、ある程度の量をしっかり計画的に送ってくれなければ、東京がちょうどこれからお盆の時期で、桃のギフトが始まるという部分においてはまだまだだねとの意見もいただいております。

そんなことで、農協としても管内の生産者に年間5千本、60%補助を出して苗木の植栽を今年から始めているわけなんですけど、是非知事のご協力をいただきたいなというふうに思っています。

〔知事〕

いや分かりました。桃、栗3年とありますが、3年経てば・・・。

〔参加者〕

3年というのは・・・まあ4年・・・。

〔知事〕

3年は難しいですか。

〔参加者〕

3年はちょっと難しいですけど・・・。

〔知事〕

この「アルプス小町」というのは素晴らしい品種ですね。袋掛けはいらない、授粉はいらないということですね。

〔参加者〕

この時期に出るということで、品薄の時期になりますので・・・。

〔参加者〕

もう一点、この管内に西野という共選所があるんですが、そこは日本で初めて桃の光センサーを入れた所なんです。それからもう20年経過して、もう全国的にも桃については非破壊の、光センサーによる糖度保証というものをしているわけなんですけど、こま野農協も22年に向けて、今センサーを4箇所ぐらいに集約して、全ての桃に光センサーを通していこうというようなことで、今計画を組んでいますから、それにつきましても県、国にもいろんな面でご協力をお願いいたします。

〔知事〕

是非ね、そういうのを作っておけば。この間八代で立派なものがありましたな。あれを上回る立派なものの一つ是非作るじゃないですか。

〔参加者〕

そんなことで今やっていきますからお願いします。

〔果樹食品流通課長〕

今具体的な相談をしております。

〔知事〕

そうですね。じゃあもう具体的な話になっているんですね。結構なことですね。

〔参加者〕

南アルプスでこれほどの素晴らしい果物が、李王にしろ、アルプス小町にしろ、出ているんですけど、先日知事も海外、アジアの台湾のほうに行かれて何か販促会をしたようですけれども、その評価はどんな感じですか。

〔知事〕

それは素晴らしいものがありますね。これはもう何たって日本の桃、山梨の桃というのは、もう向こうですでによく知られているんですよ。山梨の桃はいい物だということで、かつて羽田空港から台湾へ飛行機が出ていたことがありましたね。あの頃は割と検疫が緩やかで、みんなお客さんが持って帰ったんですね、山梨の桃を買って。だから台湾じゃあ山梨の桃というのは非常にいい物だという評価になっている。だから試食しても素晴らしいと言って、是非入れてもらいたいとみんな言いますね。もうすでに引き合いがあるんですが、ただ検疫の問題が非常に厳しいものだから、そここのところをどうやってクリアーするかということですね。それに今一番知恵を絞っているところです。

〔果樹食品流通課長〕

こま野はまだ台湾向けの輸出について、共選所の体制がまだ整わないということなんですけれども、順次そういう準備をしていただいて、輸出する方向で取り組みをしていただければありがたいというふうに思います。

〔参加者〕

そうすることによって、国内だけじゃなくて、例えば、アジア圏の中で山梨ブランドというのが確立されて、流行りものじゃないですけど・・・。

〔知事〕

今年、笛吹農協が香港へ多少出しているんですよ。来年、今度は大々的に香港で一つ山梨の桃、ブドウですね、その類を積極的にPRしようかと思っっているんですがね。香港だとかシンガポールってのは、余り検疫は厳しくないですからね。その辺をまず手がかりにしてやっていこうということですね。中国では桃というのは非常にめでたい食べ物で、特にこの赤い桃というのは非常に評価が高いんですよ。今りんごがちょうど50億円、台湾とか香港とかあの辺で出ていますけどね。今、山梨はせいぜい400万ぐらいですか。

〔果樹食品流通課長〕

今約2億ぐらい・・・。

〔知事〕

2億円・・・そんなに出てるの（笑い）。だからせめて50億ぐらいにはですね、目標に。（笑い）。

〔果樹食品流通課長〕

一応目標は10億になっているんですが。

〔知事〕

ああそうですか。まあ貴陽（きよう）もやりますから。貴陽も持っていったら良かったですよ。非常に評価が高かったです。どうもあっちの人達は割と甘い物が好きで、酸っぱいのは嫌うようですけれども、あの貴陽は甘いから評価が良かったですね。

〔参加者〕

当面は県としてはアジア圏の輸出・・・。

〔知事〕

そうですね。アジア、それからロシアね。ロシアもいいですね。だから今度は青森に行ってロシア圏の方の話も聞いてこようと思っておりますがね。そういうふうにしなれば、せっかくこういういい物を作っても、ちょうど7月の半ばからぐんと値段が下がるからもったいないじゃないですかね。少しでも外に出せればね、値段が下がらないだけでもいいじゃないですかね。

〔参加者〕

私はお菓子作りをしています。生産者の方の話を聞いているつもりでも、ご苦労が分からなくて申し訳ないんですけれども、捨てる、廃棄される果物を使って色々なお菓子を作っています。小さな店ですので微々たるものでございます。

〔知事〕

いやいやそんな事はないですよ。有名なお店ですよ。だけどずいぶん名前は知られているから遠くから買いに来る人もいるでしょう。

〔参加者〕

生菓子ですので地域が限定されますから、こういうシーズンになりますと観光でいらした方が寄ってくれることがありますね。小さな町ですので。

〔知事〕



そのうちにお菓子工場ができればいいですよ。

〔参加者〕

商工会では、今完熟フルーツにこだわった地域振興活動ということで、「完熟フルーツこだわり探訪」というツアーを組んでいます。これは3年前から国の補助をいただきながらスタートしているんですけど、南アルプスに来ていただいて、木々で本当に熟した、完熟になった果物を食べていただいて、ファンになっていただいて、また来ていただくという、そういう目的でやっています。

特に完熟フルーツマスターを商工会で認定させていただいて、今日も3名ほど参加していますけれども、フルーツマスターには、実際これを食べるとおいしいとか、果物への思いとか、南アルプスの良さもPRしていただきながら、お客さんには果物狩りやジャム作り、そしてフルーツにこだわったランチを食べて帰っていただくということで、名古屋圏からもかなり来ていただいているんです。

これがもともと、全国でも商工会で2ヶ所目ですけれども、農商工連携88選に選ばれました。南アルプスがフルーツでまちおこしをしようということで、商工会が取り組んでいるんです。

南アルプスという名前は、1回聞けば忘れないんですね。それをさらにブラッシュアップするために、いい果物をキーワードにした地域振興活動をしたいということで、新しい完熟フルーツの流通であるとか、特産品の認定では、南アルプスLOVEというブランドで商工会が認定制度をつくっています。いい桃は農家の方々に切磋琢磨して作っていただいて、それをよそに売っていく、よそから来ていただくという仕掛けを今商工会のほうで中心になってさせていただいております。

〔知事〕

やっぱり桃も山梨に来て食べなければだめだと。完熟フルーツ、完熟の桃をね。

〔参加者〕

木でなったものを食べていただく。

〔知事〕

やっぱり違いますか。

〔参加者〕

ここにも3名、完熟フルーツマスターに認定した人がいます。今年も完熟ツアー客などが相当数来ていますが、感想などを知事さんに・・・。

〔参加者〕

完熟がおいしいというのは当たり前なんですけど、物にはやっぱりいい面と悪い面がありますよね。完熟というのは、本当においしい所を食べられるというのは確かですけど、流通には向かなかつたり、そして出荷するものは流通の過程を経て、お客様に届いた時点

で、おいしいということを前提に作っているということです。

ですから完熟っていうのは全ておいしいかと言われると、それはまた違うんですけど、ただ、ここに来ないと食べられない味があるというのが完熟の良さだと思っています。そういうことで私たちはNPO法人を組織して、そしてここでしか食べられない味を提供することによって南アルプスのファンを増やしていこう、そしてまた都会に帰って、南アルプス産、JAこま野産の果物がおいてあった時に、手に取ってもらえるチャンスを増やすということが一つの目的だと思っています。

ただ、今までも南アルプスに来てもらおうという、そういう活動がなかなか活発化できなかったし、やはり出荷がメインの生産農家としては、そういうところには割けないと思いますので、それが両輪となって、出荷でたくさんの人に味わってもらおうと同時に、ファンを増やしていくという形の活動ができるような支援をもっとしていただけるとありがたいです。やまなし農業ルネサンス大綱にも都市農村交流とか入れられているとは思いますが、もう少しそういうことに対しても継続的な支援をいただければ。

それからもう一つは、生産が拡大してくるとロスが多くなるんですよ。完熟がいいかという、逆に出荷はできなくなってしまって、おいしいにも係わらずそれが流通に回らない。いかにしてロスを抑えて、お金にしていくかということも手だと思います。

例えば、今JAこま野管内で共選所を回っていますが、ハネ桃として果樹園の直売所で売られている量というのはものすごくたくさんあるんですけど、それから落ちた、その下のランクのものについては、ほとんどが県外の業者に回ってしまっています。山梨の桃にもかかわらず、県内ではそのハネ桃を処理することができないで、例えばこのアルプス小町といういい商材がありながら、その全てが管内では処理しきれずに、B級品のものは県外のほかのものと一緒にたになって桃のネクターになってしまう。

桃の加工品というのは、今の段階では余りたくさんの用途が考えられていないので、できればそれを南アルプス管内のお菓子の業者さんに優先的に、使いやすい形で回っていくようなことも考えていただければ。そういう意味で私たちは、県内の業者でジュースを作っているんですが、桃のネクターだけは・・・。

〔知事〕

こちらにあるのはブドウですね。

〔参加者〕

それはブドウと桃のミックスジュースです。ネクターだけですとどうしてもドロドロします。ネクターではなくて、本当にピューレの状態で飲むという、新ジャンルの飲み物として出すということもしています。また、甲州というのは果汁があります。果汁ストレートの甲州ではおいしくないけれど、または風味が乏しいけれど、山梨の桃とミックスすることによって、これは50%50%なんですけど、山梨のオリジナルの、山梨でしか作れないジュースというのができるんです。

ただ、そういう加工ができる設備が県内にほとんどないんです。ですからそういった果実のジュースを、まあジュースに限らないんですけど、農産加工ができる、しかも小規模なものではなくて、ある程度の量を処理できるような加工施設をもう少し柔軟に造れるよ

うな支援があれば。

今業者さんも、卸売団地周辺の冷凍の会社でも荷物の扱い量が減ってきて、山梨県内の果実、色々なものがあるにもかかわらず、それが県内で生かせていないということがありますので、拠点の整備をしていただければ、そういったものが生かせて、それをまた県内の業者さんが使っていける道があるんじゃないかと思っています。

〔参加者〕

かなりの量が実際出るんですよ。受けてくれるところがあれば、私もかなり協力できるんですけど、毎日山梨県から5キロの桃が約20万ケース出ていると。それが今日一日じゃない、毎日毎日出ているので、全部地元に来るだけでははけないという状態があるというのは事実なんです。だから市場に出荷して、それからスーパーで売ってもらうという部分が基になっているというのが今の山梨県の状態だと思っています。

ただ彼が言うとおりの南アルプス市のファンを作ることについては、もうみんな協力すべきだというふうに強く思っているんです。

〔知事〕

確かにね。南アルプスでも、観光というのは今のところサクランボ観光ですよ、お客さんが来るとなるとね。桃を使った観光というのは今まで余りないですね。峡東のほうを見ても桃を使った観光というのは余りない。というのは、桃は忙し過ぎちゃって観光客なんかあしらっちゃいけないんですね、基本的には。

しかし、そこのところをやっぱり完熟桃とか、そういうふうな形でお客さんを呼んだり、あるいはこういった加工品を作ったりすることはおいにあり得るんですね。

〔参加者〕

桃の観光だけで食べている人も何人かいるんですよ、南アルプス管内にも桃だけをやっているという人がですね。

〔知事〕

やっぱり桃をもいで・・・。

〔参加者〕

もがせて。

〔参加者〕

私どもの「こだわり探訪ツアー」なんかでも桃観光をやりますけど、桃だけ専属でやっているという果樹園も何軒か市内にはありますね。

〔知事〕

加工の関係ですけど、設備を作ることについてはいろんな補助制度がありましてね。それはやる気になればいくらでもあるんですよ、助成制度はね。ただ造ったはいいけど、

じゃあ販路が、売れるかどうかということですね。そこが大変ですよ。

〔参加者〕

大規模なもの、小規模なものの中間的なものが県内にはないですね。お隣の長野県ですと、それぞれの農家が余った農産物を加工して、例えばそれをりんごジュースにして、そのジュースを自分たちの直売所とか、道の駅に卸すというシステムがかなり発達しているんですけど、山梨県内では農家や農協からのある程度まとまったものを処理して、それを特産品のクオリティーで出せる、加工してくれる会社がほとんどないんです。

〔知事〕

そうですか……。どうですかそれは。

〔果樹食品流通課長〕

これからになると思うんですけども、農商工連携とか、地域活性化プロジェクトみたいな形で県内の業者と農業者で連携してやるというシステムの部分は、今取れる形にはなっています。

県外の専門業者と農業者の人たちが組んで製品を作るとか商材開発をするとか、そういう事業というの、これから農商工連携事業という形で整備されてきますので、そういうものを活用した形を地域の皆さん方が知恵を出し合いながら、どういう方向でどういう物を作っていくかというプラン作りをしていただきながら、進めていける方途も出てきましたので、その辺は商工会なりにご相談いただく中で、具体的なプランニングをしていくことで、新たな商材づくりができるんじゃないかと思います。

そして生産者の方が自前で作るというのは、加工している暇がないというのが実態だと思いますので、やはり専門の業者とタイアップした中で商材開発をするという形も、これからは必要ではないかと思えますし、一定のロットを確保する時には、そういう方途を取っていかないと商材として量が確保できないということがあります。

〔参加者〕

お話の途中ですけど、これが「南アルプスの風」っていいです。これはスモモのはねだしをつかったスモモドレッシングです。商工会の女性部で作りました。

〔知事〕

これはやっぱりサラダのドレッシングに使うんですか。洒落ていますね。

〔参加者〕

商工会の女性部の人たちが手作りで作っているということなんですけど、やはり今言ったように、加工原料の保存というのがやっぱりネックになっちゃっているんです。材料は確保できますけど、それをピューレ状態にしたときに……。それを通年で販売したいんですよ。

[知事]

保冷倉庫みたいなものだけ・・・。

[参加者]

冷凍設備ですね。その辺がどうもないんで、なかなか・・・。

[知事]

一時的なものになっちゃうんですね。

[参加者]

一時的なものになってしまう。

[知事]

これを時期だけ大量に作って、というわけにはいかないんですか。

[参加者]

賞味期限がありますので。原料は確保できるんですが、できればそれを保存するような施設が何とかできないかなということで、昨日もちょっとそんな会議を・・・。

[知事]

色々工夫をしていただいて、県も工業技術センターとかそういう所もありますし、もしやるならば相談をしていただければ・・・。

[参加者]

これを作る時なんかも工業技術センターでかなりご指導を仰いで、調味内容とか、原材料とか。結構評判がいいです。

[知事]

これはデザインもいいですね。洒落ているじゃありませんか。

[参加者]

デザインがいいでしょう。

[知事]

あか抜けているというかね、こういうのもね、非常にいいんじゃないかと思えますね。

[参加者]

知事さんのお手元にこのパンフレットがいつていると思うんですけど、前のほうにジャムが6種類あります。私たちは素人のおばさんたちで、本当に素人の団体でして、加工施設を造っていただいて加工組合、今は企業組合となっていますけど、ほたるみ館と、それ

から町の駅の指定管理を受けまして4年経ちました。今日はジャムの宣伝をしていきたいなと思ひまして。11種類のジャムを手作りで作っているんです。是非色々な面で。

〔知事〕

町の駅も指定管理を受けているんですか。

〔参加者〕

はい、販売しておりますので、あそこを通りましたら是非お寄りいただきたいと思ひます。

〔知事〕

課長は良く知っているんですか。

〔果樹食品流通課長〕

ええ。立ち上げの時に。

〔参加者〕

お世話になっています。(笑ひ)

〔果樹食品流通課長〕

この企業組合は、生産部会と加工部会と販売部会と、それぞれ専門分野を受け持ってやっていくということで、通常生産加工までなんですけど販売の分野のほうまできちっと組織運営ができています。

〔知事〕

ほたるみ館や町の駅で販売しているんですか。

〔参加者〕

ほたるみ館で週1回土曜日に朝市をやるようにして、町の駅は月曜日が休日で、あとは年間通してやっています。

〔知事〕

それで大体皆さん何人、大勢の方でおやりになって、大体手一杯でうまく回転しているという感じですか。収入もそこそこに入って。

〔参加者〕

そうですね。市の協力も得ながら、まあまあでやれています。(笑ひ)

〔知事〕

そこそこの利益も上がって。

[参加者]

本当は市の補助金をもらわないでやっていきたいと思っていますけど、まだ今のところ。  
(笑い)

[知事]

まだ独り立ちというわけにはいかないですか。

[参加者]

指定管理を受けて5年間はしっかり、じっくりやって・・・。

[知事]

独り立ちできるといいですね。

[参加者]

経営管理もしっかりやっていきたいと思ってがんばっています。

[知事]

何人でおやりになっているんですか。

[参加者]

加工のほうは、一応組合員は126名なんですけど、生活改善研究会の団体で立ち上げました。国と県で支援していただいた建物なので、一つの団体だけに貸し出すということにはできないということで、一般募集もしました。最初始めた時は137名で、ちょうど10年経ちました。企業組合として4年経ちまして、まあまあでやっています。

[知事]

何とか収支とんとんになるといいですね。

[参加者]

私どもの商工会が経理のほうを受け持っていますけど、大丈夫、しっかり黒字でもう・・・。

[知事]

補助金を除いてどうですか、黒字になりますか。

[参加者]

補助金が、もうちょっとだね。

[参加者]

もうちょっと。(笑い)

〔参加者〕

もうちょっとで自立できるところまで来ていますから。

〔知事〕

それは期待しています。

〔参加者〕

ジャムのほうの宣伝もよろしく願いいたします。色々加工品も作っています。野菜、果物などと、加工品の売上は五分五分という感じなんですけど、もうちょっと年間の売上を増やしていかないと。何とか黒字にはなっていますが、がんばって行きますのでよろしく願いいたします。

〔知事〕

そうですね。是非がんばって下さい。本当に素晴らしいですね。

〔参加者〕

前に置いてあるスモモは李王（りおう）と言いまして、私が平成2年に登録を取ったんです。南アルプス生まれのスモモで貴陽（きよう）というのが非常に人気なんですけど、ちょうど李王が旬ですので今日はそちらを持って参りました。香りも非常にいい、それから甘いスモモです。ツアーなんかでも来てくれるようになって、非常に人気になりまして、今600坪の所でこれを作っているんですが、ほとんど観光で売れてしまいます。

〔知事〕

観光で売れちゃうんですか。

〔参加者〕

そうです。今、それ専門で観光をやっているんですが、毎日かなりの人が押しかけてやっています。

〔知事〕

やっぱりもぎ取りの観光ですか。

〔参加者〕

そうです、もぎ取りです。あと宅配のほうはもう6月20日に締め切らないと、たくさん来過ぎて・・・。

〔知事〕

宅配が、都会の申込みがね。じゃあもう市場には出さないという・・・。

〔参加者〕



それはもう北海道から沖縄まで。

〔知事〕

何かPRは特別なことをおやりになっているんですか。例えば色々なインターネットに載せるとか・・・。

〔参加者〕

ネットはもちろんです。

〔知事〕

ホームページを持っているわけですね。

〔参加者〕

ホームページを開設しています。今日ちょっと持ってきたんですが、楽天の市場で、これは私が出しているんじゃないかと楽天で出しているんです。果実庵というのを今出しているようです。高島屋なんかでも、箱に入っているんですが、8千円ぐらいで売っている状況で・・・。

〔知事〕

楽天の市場なんですね。

〔参加者〕

そうですね。そんなこともやってくれているようです。私の宣伝以上にその人たちが宣伝してやっています。

〔知事〕

いろんな方がお作りになっているわけですね。

〔参加者〕

それが余り作ってなくて。生産者泣かせの果物でして、色づくのに10日か15日ぐらい掛かるんですね。今までのスモモは、3日もすれば収穫が終わっちゃうということなんですが、これは20日間ぐらいやらなきゃならないんですよ。ですから市場出荷には非常に不向きということで、農協のほうでもほとんど取り扱ってくれないような状態になっていますが、それを逆手に取りまして観光を始めたわけです。長い期間お客さんをお呼びする。そして旨くてよそにないということで、非常にいいですね。

〔知事〕

素晴らしいですね。これは栽培面積は広がっているんですか。

〔参加者〕

ようやく知れてきたという状態じゃないですか。お客さんはいっぱいいるのに作る人がないという困った状態なんですね。けどもやっぱり完熟にするとむだがでます。2割か3割は捨てるようなつもりでやらないと生産ができないという状態です。だから市場出荷のように、全てを売ろうということではなくて、2割、3割捨てても、それだけの金額を取ればいいじゃないかということが、もし皆さんにできるとすれば増やしていきたいなど。甲府の桜井町の方がやっています、その人たちはやっぱり増やしている。そしてお客さんをいっぱい呼んでいるんです。ですから直接お客さんに買ってもらうんだったら、これほどの物はないというような気がしています。香りが非常にいいです。

〔知事〕

たいしたものですね。恥ずかしながら、始めて知りました。貴陽か太陽かってね。貴陽というのもあるんですね。

〔参加者〕

そちらのほうは有名ですよ。

〔知事〕

貴陽もずいぶん仙台のほうでも栽培しているんだそうですね。広がっているという話です。

〔参加者〕

結構、九州から東北まで植え付けされているようですね。

〔参加者〕

相当苗が出回っているということですかね。

〔参加者〕

だから結局ブランドを作っても、例えば貴陽でもそうなんですが、全国へ散らばってしまう。その中でそれじゃどうしたらいいかということですね。

〔知事〕

種の登録みたいなことをされたんですか。

〔参加者〕

もちろんこれは登録してあって、許諾金は取っています。もう苗木は全国へ散らばっていて、その地域地域でやっぱり観光で売っているんです。山形県でも売ってる人がいます。

貴陽なんかも全国に散らばっているけども、南アルプスのブランドとしてやっていくには、やっぱり特徴を何か作っていくと。ここに来て、はじめて貴陽のうまいものを食べれるという方法にしないと、出回り過ぎると値段も下がるし、余り面白みがなくなっちゃう。だからブランド作りというのは長い期間掛かりますけど、生産者も努力して我慢をしながら

ら、その完熟に向けてやっていかないとだめな気がしますね。

〔知事〕

南アルプスは、果物でも非常に多様性があるものだから、桃、ブドウはもちろんですね、スモモがあるしサクランボもあるし、そういう意味では観光には向きますよね。

〔参加者〕

向いていると思うんですね。先ほど芦安のほうから出たんですが、大体年間6月から12月まで観光のお客さんが2万人ぐらい来てくれるんですが、個人の果樹園へそれだけ来てくれるんですよね。だけでも帰りに「温泉どこに行くの」と聞くと、「ほったらかし温泉（山梨市）」ということになっちゃうんです。やっぱり芦安に向けるルートを考えたいなど前から提案しているんですが、本当はこの市内で周遊をしながらそのお客を回して歩くとかなりいいですよ。そういう方法ができないですね、今のところ。

〔知事〕

芦安の辺りはペンションとか、それはどのぐらいあるんですか。

〔参加者〕

そんな数的には多くないんですが、今言ったような紹介ルートとしては、個人個人のつながりしかないものですから、もう少し密につながができれば、さらに向上はできると思います。

〔参加者〕

で、ほうとう屋さんはどこだというと竜王だと、こういうことになっちゃうんですよ。だからほうとうなんかも本当に拠点がいいですね。そうすると周遊できるんですよ。昼間はそこに行けると。

〔参加者〕

今品質の話が出たんですけど、うちなんかお客さんを送るほうの立場なんですけど、送るほうとしてはいい物を出してくれないと困るわけですよ。お客さんの中には、例えば桃を食べたいがために、1年に1回うちに泊まりに来てくれる方がいるんです。それも富山からわざわざこの桃を食べるために5年連続でうちに泊まってくれているんです。でも残念ながらその桃は御坂の桃なんです。非常に残念でしょう。

だから何とか南アルプスのものをというふうには思うんだけど、そういう意味で一番大事なのは、基になる果実の品質なり、甘さなり、格好なり、色なり、そういうことの確保を、いつもほかより抜きこんでるような努力というのをしておかないと、長野だとか宮崎とかに負けちゃうと思うんですね。そういうことにも努力するようなシステムをやっていたきたいと思います。

もう一つは、口のきき方なんです。これちょっと変な話だけど、やっぱり最先端でお客さんと対応している人の会話というのは、非常に大事だと思うんですよ。ところが、例

えばある農園さんなんかに行くとおばちゃんが出てきて「あんなの、ないよ」。方言は僕はいいと思うんですよ。すごくいいと思うんだけど、心がこもっていないような、そういう表現というのは、皆さん、私もちょっとそういう時があるんですけども、そういうことの意味統一というか、みんながお客さんに対して最前線にいるんだよという意識を持つような、そういうことも県で取り組んでもらえるようなことがあれば・・・。

〔知事〕

おもてなし講座とか、色々一生懸命やっているんですけど・・・(笑い)。

〔参加者〕

今言った研究関係のものについては、南アルプスに拠点をおいていただいて、南アルプスの果樹を盛り上げていただきたいと思いますと思いますけど。

〔知事〕

そうですね。色々な物がありますけど、これはハチミツで、これはらっきょうですか。いや桃ですね。

〔参加者〕

花びらジャムです。

〔知事〕

これ花びら入りのジャムだ。これはなんでしょうかね。

〔参加者〕

それはリモーブというマシュマロです。

〔知事〕

マシュマロですか、なるほどね・・・。これがサクランボとかのジャム・・・。こういうのはどこがお作りになったんですか。

〔参加者〕

八田の加工施設で、私どもとハッピークラブさんで作っています。

〔知事〕

これはジァ・マリア。

〔参加者〕

認定品ですね。南アルプス市のブランドですね。

〔参加者〕

貴陽と黒胡椒を使いました。

〔知事〕

これはやっぱりジャムですか。

〔参加者〕

黒胡椒入れています、ジャムです。コンフィチュールって言ううちでは売っていません。今、東京のホテルのほうから色々お話がございます。

〔知事〕

そうですね。これもそうですね。

〔参加者〕

いいえ、私です。(笑い)

〔知事〕

これは焼き肉のたれですね。

〔参加者〕

ハッピークラブです。私たちの会も一応立ち上がって5年程度です。農家のおばさんたちが20人程度でしている会なんです。一応ジャム作り、漬物、味噌作り、味噌は請負の形で地域の皆さんにとっても喜ばれております。

最近はジャムも売れ行きがちょっと低迷してしまして、今は商工会でしておりますハッピーパークさんと、県のスマイルショップさん、障害者の施設、そこに置いていただいています。3年ぐらい前から、地域の果物を使った、今それにはプラムが入っているんですが、焼き肉のたれを作っています。旧八田村の齋藤村長さんの時代に造っていただいた施設なんですけど、ジャムと漬物と味噌の加工はあるんですけど、そこに惣菜の部屋が欲しいんですよね。それがないと保健所の許可が取れないんです。私たちも試行錯誤しながら作っていますが、許可を取ることができなくて今とても苦しんでいるような状態なんです。

〔知事〕

それでここに非売品と書いてあるんですか。

〔参加者〕

そうです(笑い)。是非南アルプス市と県のほうからお願いして、南アルプスのブランドでこの焼き肉のたれを販売したいと思っています。よろしくお願いします。

〔知事〕

何が足りないからダメなんですかね。

〔参加者〕

やっぱりその部屋がないんです。

〔知事〕

加工の部屋がない。

〔参加者〕

そうです。

〔知事〕

衛生基準を満たせない・・・。

〔参加者〕

保健所の許可が取れないんですよ。

〔参加者〕

部屋を分けなければ取れないんです。

〔知事〕

ちょっと補助金をもらって改修してやったらどうですか。

〔参加者〕

今とても補助金という時代じゃないですからね（笑い）。私たちも棟を造ってまでも、その加工をするというような資金もそれほどないし、だから何とかして市役所のほうでも保健所へお願いしてもらって、何か作りたいと思っているんですけど、よろしく願いします。

非売品ですけどやっぱり、その季節の果物で、色々果物なりの味がして、作った時には近所にお分けしたりして食べていただいています。皆さん本当に喜んでくれて、早く作って販売をして欲しいという声が出ているんですよ。だから是非お願いしたいと思います。

〔知事〕

それはもったいないですね。そうですね・・・。しかし保健所だとなかなか厳しいね。

〔参加者〕

ですから今言われたように、そういうアンテナショップ的な状況を取ってもらって、商材が決まったり、計画が決まった段階で具体的に動かすということも必要なのかなと思いますので、研究をしていただいて、その成果を具体的にする時に行動に移すということでもいいんじゃないかと思います。

〔参加者〕

私は商工会さんの指定管理施設のハッピーパークの中でレストランをしております。先ほど商工会さんの話にありました「フルーツこだわり探訪」というツアーの中で、昼食のランチをやっています。桃の冷製パスタということで、フルーツランチを開発しながらやっている。NHKさんの取材もあったんですけど、そんなことをやりながらこういったジャムを使ったり、色々なことをしているわけなんですけど。

私たちのところは、正直なところ9割は地元のお客さんです。南アルプスだったり、甲斐市だったり、山梨県内のお客さんです。1割が県外の観光客なんです。時期もものすごい限定されます。採れる時期しかお客さんが来ないですから。どちらかという私たちは観光のお客さんより地元のお客さんを相手にしていることが多いです。正直、桃とかこういう生ものはもちが悪いですし、価格も高いですし、使いづらいんですよ。

この桃のコンポート、これは幾らですか。

〔参加者〕

これだと500円ぐらいですね。

〔参加者〕

500円ぐらいしますよね。今、マックスバリューで中国のものだと100円以下ですよ（笑い）。そのぐらい差があるんですよ。僕たちはお客さんから直にお金をもらうところです。どうしても高い物より安い物を選ぶお客さんがいっぱいいらっしゃいます。その桃がうまく回って価格が下がってくれば僕たちももっといっぱい使いたいと思うんですけど、今ハッピーパークで売っている野菜とかを使ったりしながらやっていますが、原油高でコストも上がっていますし、なかなか難しいんです。

僕、さっきから話を聞いていて思ったんですけど、軽井沢のアウトレットに行ったんですよ。そしたらこういったものが、ものすごいきれいな瓶に入って、ジャムだとかジュースだとかコンポート、もう本当にこの部屋いっぱいぐらいの中で売っているんですね。グッチとかヴィトンとか、そういうブランド品の横で売っているんですよ。そこで買っているのは誰かなと思ったら中国人なんですね。中国人の方、ものすごい買っていました。なので、もっと知事さんに中国の人をいっぱい連れてきてもらって（笑い）、そして芦安の温泉に入ってもらえば観光ももっと良くなるかなと。僕たちはどうしても地元のお客さんだから。

〔参加者〕

その桃の缶詰は富士五湖のほうのホテルなんかには納品することがあります。そこはもう本当に中国圏の観光客がたくさん泊まる所です。そこではやはり桃がすごく喜ばれるんですね。その瓶詰めは持って帰れるということでお土産で売ると。

〔知事〕

日本に来る方というのは本当にお金持ちで、しかも日本の食品は安全だという彼らは彼

らなりのそういう思いがありますしね。それからデザインとかそういうものが非常に洒落ていますからね、やっぱりこういう日本のものに対する魅力というのがあるんでしょうね。

〔参加者〕

今、うちのネットなんかに入ってくるのは、やっぱり香港と韓国の観光を受けてくれな  
いかというもので、秋は非常に多いです。だけど全部断っているんですけどね。やっぱり  
やれないなと思っているんですね。

〔知事〕

どうしてなんですか。

〔参加者〕

本当に私たちは零細で、女房と二人でやっているのもとてもできないですね。大きなと  
ころでやっぱり対応しなければならぬんですよ。私のところはバスは受けられないん  
です。農園までの道にバスが入りませんし、行けないんですが、引き合いはすごい多いで  
すね。リンゴ狩りをしたい梨狩りしたい・・・。

〔知事〕

もったいないですね、だけどね。もうそれは入れられないんですか。

〔参加者〕

そうです。だからネットでどんどん来ますけど断っています。だからきっと引き合いは  
あると思うんですね。もしそういう農家がまとまって呼べるということになれば。

〔知事〕

富士山がありますからね、その富士山の五合目に行ってそのあとどうするかということ  
なんですよ。それをそういう観光したりということなんですよ。

確かに韓国の観光客というのはかなり日本と嗜好が近づいてきましたから、この間南ア  
ルプスへみんな登りましたね、韓国の方が。そして慶雲館に泊まって帰っていったけれど  
も、そういうふうに日本人とかなり旅行の嗜好が一致してきましたね。だから日本人がこ  
ういう観光、果物の観光を好むということであれば、彼らもみんなそうなんですよ。ね。  
だからそういうお客さんはいるんですよ。

〔参加者〕

関連ですけど、私どももこの「フルーツこだわり探訪ツアー」で東京の大手のはとバス  
とか、京王観光とか、こちらで言うと静鉄とかという、色々な所のエージェントの営業に  
ここ2、3年歩いていますけど、はとバスなんかの言うのには、南アルプスというのは確  
かに6月のサクランボは非常に素晴らしいものがあるんだと。だけどそれに付随する何か  
がないんだと。だからコースが非常に組みにくい地域だと、こう言っているんですね。

例えば峡東のように、ぶどうと温泉郷、温泉郷とサクランボ狩りというのであれば非常に



組みやすいと。だけど南アルプスの場合は、ここまで来たんだけどあとがちょっと続かないと言うんですね。

だから私どもは、食事する場所も大型バスが来た場合なかなか確保できないという一つの弱点もありますけれど、南アルプスだけということじゃなくて、今日は南アルプスのブランド確立というようなことでやっていますから、やっぱり県全体、それから甲斐市も、北杜市も含めた中で一つ連携をしながら、観光客をアップさせていくと。そうしませんと、南アルプスだけということに限定してしまうと、なかなか観光資源も限られてきてしまいますしね、もうちょっと広く・・・。

〔知事〕

山梨県だってそうですよ。韓国なり中国から来て、やっぱり山梨県だけでやっていくというより、かなり広域に動きますよね。非常に広域に動いています。例えば最近多いのは、羽田から入って富士山を見て、それから北に上がって行って北アルプスのアルペンルート、そして富山空港から出るとかいうのが多いですよ。おっしゃるとおりでね。

しかし、いずれにしてもそういうPRをすれば、南アルプスでそういう果物の観光があるんだよと、もぎ取り観光があるんだよということをPRすれば、やっぱり観光旅行社というのはみんなそういうものを組み込むんですよね。だからPRすればPRしただけのことはあるんです。ただそういう韓国人とか中国人観光客を受入れられるような体制があるかどうかですね。あの人たちは金持ちだから日本人よりもたくさん買い込みますよ。

これはもいで、袋に入れて、それでこのまま空港に持っていった時にどうなるんですか。やっぱりこれ検疫が引っかかるでしょうね。

〔参加者〕

それは生ものはだめでしょう。

〔参加者〕

加工品じゃいいですけどね。

〔参加者〕

こっちに働きに来ている中国の人たちがもぎに来るけど、持っていきますけどね、箱に入れて。

〔農業技術課長〕

韓国はリンゴがだめらしいですね。台湾はスモモ、桃、これはだめです。香港、シンガポールはないんです。持って行っていいんです。

〔参加者〕

だから香港経由で持っていくんですよ。箱送ってますよ、桃の。

〔農業技術課長〕

正式に入ってくるのとお土産で持っていくのとは違うのかもしれませんがね。

〔知事〕

まあそういう果物の観光というものを少しPRするようにしましょうね。

〔参加者〕

私はいろんな果物をやらせてもらっているんですけど、以前、少し観光農業の形で始めていて、やり始めたところなんですけども、思ったことがあるんですよ。私たちの地域はちょうど芦安のちょっと手前に集落をなしているんですけども、その10年先、20年先を見た時に、農業の衰退というのはやっぱり見えているような気がするんですよ。こう明るい話が進んでいる中で、なかなかちょっとマイナスな話になるんですけども。

以前パラグライダーができたり、本当に眺望のいい富士山が真正面に見える素晴らしい場所があるんですけども、私はそこを含めて、あの地域全体が観光的な発展ができないだろうかと考えたことがあるんですよ。

でも今現状ではスモモの老木がいっぱいあるんです。じゃあそれを改植して何かをしようとして、サクランボを植えよう、桃を植えよう、新しい貴陽もあるし、新しい県のブランドのスモモもあるしということがあっても、収穫できるようになるまで何年もかかるし、今植え替えても俺は採れないという現状が多分皆さんの中にあると思うんですよ。

まあ夢みたいな話かもしれませんが、改植の期間の収入をある程度補償するという中で、その集落そのものが観光的な施設を造って、情報センターを造って、お客さんが来たらここへ入って、ここへ行ってとかというように、本当に地域、集落として管理された果物の観光経営というのを、集落の人たちが主体となってできないのかなと思ったことがあるんです。

それにはいろんなネックがあって、私は山の上の、猿にやられて放棄された畑を一部皆さんからお借りして、そして何とかしようと思って始めたんですけど、鳥獣害がものすごくてなかなかうまくいってないんです。

例えば県や国の補助を得る中で、そういうことがもし地域的にできるものなら、皆さんも、これから年取っていく方々も、もしかしたら息子が「じゃ俺やってみようか」とかという話も出てくるかもしれないけど、現状でそれを個人個人なり、集落の誰かが先頭になってやろうといたら多分難しいと思うんですよ。

そういうことを県とか国の中で、じゃあこの地帯をいったんモデル事業としてやってみようじゃないかというようなことで、夢みたいな話かもしれませんが・・・。

〔知事〕

いやいや、最近あっちこっちに出てきていますね、地域営農という形でね。地域全体で生産企業みたいなものを作って、若い方が何人かおられて、お年寄りもおられるんですけども、まあ若い人が中心になってお年寄りを助けながらですね・・・。

〔参加者〕

その観光版みたいなもの・・・

〔果樹食品流通課長〕

それは集落営農みたいな形の背景を作ることができますし、あと圃場の整備は、国の補助事業みたいな形での取り組みもできます。

〔参加者〕

ただ問題はやっぱりそこの収入なんですよ。改植していく、果樹というのは、本当に植え替えたならこれから食べていけるかなという話になっちゃうんで・・・。

〔果樹食品流通課長〕

その手立てで、一応さら地にして整備して、苗木を植えてというと非常に掛かりますので、2年生、3年生ぐらいの苗を別のところに育てて、それを植え付けるというような形で期間を短縮するという部分についても、県として補助をするようなシステムになっています。これを活用していく例はございますので、そういうふうなことは地域の人たちでどういうケースができるか・・・。

〔参加者〕

合意形成が一番問題かもしれませんが、ちょっとした夢として、できたらいいなと思ったことがあったので、お話しておいたほうがいいかななんてふと思ったものですから。

〔農業技術課長〕

本当に、果樹の場合には一定期間収入がなくなっちゃいます。ただ圃場整備をやるような場合、まずみんなで話し合いをする時に、とりあえず苗を植えて、別の場所で3年ぐらいの大きい苗に作っておいて、圃場整備が完成した時にその苗を植え込むと。そういう中で、大苗の移植とか圃場を少しきれいにしたりする時の経費として、全国ではまだやっていないんですけども、今年から知事さんの新施策の中で、従来は圃場整備するための補助制度しかなかったんですけど、2年かけてスモモだと一反歩あたり20万円程度かな、果樹を撤去して植え込むのに助成を出せるようにはなっているんです。

それがあれば皆さんが1年食べていけるとか、そういう金額じゃないんですけど、そういう制度を初めて山梨で作りました。ただそれをやるには地域で合意を作り、やっぱり半分は地域の皆さんでがんばるぞというところが出てこない、なかなか難しいかなと思います。

〔参加者〕

例えば本当に集約された観光みたいなものをやるとすれば、真ん中に情報センターみたいなものがあって、そこにお客さんが来たら、じゃあ今日はこの圃場に行って下さいということが全部管理されている。皆さんでただ作っているだけじゃ、余りメリットが出てこないかなと思うんですけど、そういうことまで含めてやろうとすると、かなりのお金がかかると思うので、集落で合意形成をしてやりましょうということは、なかなか難しいような気がしていたものですから・・・。

〔農業技術課長〕

こういう例がございます。富士河口湖町の大石とか、あの辺は全然果樹なんかなかったんですけど、ブルーベリーに力を入れたんですね。あそこの組合の人は野菜組合の人々でして、実際に年は70幾つとか、若いものが中心になれと言われたら若いもんが60幾つで(笑い)、もうじき70に近いような、そんな人たちなんです。でもやっぱり観光ということで取り入れたから、お客さんが来てくれて、採ってくれて、労力は少なく、ただ楽しんでもらうということで、今あそこもお客さんを断るような具合になっていますよね。

ですから一挙に全部やれということではなくて、やっぱりどこかで核を作って、それを広げていくというような取り組みからやるのもいいのかというふうに思いますけどね。

〔参加者〕

やっぱり一番は農業後継者問題だと思うんですよ。素晴らしいこういった果物ができても、これを引継いでくれる農家がいなかったらどんどん衰退していくわけです。うちも今、果物では10ヘクタールぐらいやっているんですけども、今都会の方は農業をやりたいという人は結構いるんですよ、若い方で。それでうちにも学生さんとか、そういった方が研修などで来るときに、一応社宅としてアパートを借りたりしているんですけども、そのキャパがないんですよ。

例えば南アルプス市内で農業研修施設、要は泊まる所だけでも用意していただければ、そこが本拠地となって果物の研修をしたいとか、野菜の研修をしたいとか、そういった方はたくさん見えると思うんですよ。そういった施設があれば、例えば観光農家をやっている所に派遣したりとかですね・・・。

〔知事〕

まあけどアパートは余るぐらいありますからね。(笑い)

〔参加者〕

家賃が5万円とか6万円とかになると、一農家に結構な負担がかかりますからね。土日だけ研修をしたいという方もいますし、体験だけしてみたいという人もいるし、もう長いスパンで1年間やってみたいという人もいますし。

〔参加者〕

後継者の問題は大変だと思っているんですけど、うちで今年初めて50歳ぐらいの男性、女性、お勤め人で、いずれ60ぐらいになって辞めたら家の農業をやりたい人に、とにかく果物作りの初歩の勉強会を農協で開くからどうですかという投げかけをしたら、ちょっと時期的に遅かったんですけども、64名の方が教えてくれということで集まりました。

〔知事〕

みんな跡取りなんですか、一応。

〔参加者〕

そうなんです。本当は20代の若い方が入ってくれる、まあ何人かいるんですけど、それが理想なんですけど、今ちょっと農協で考えているのは、60という年齢からやるには、55歳ぐらいから木を植えて、60になったらすぐ農業に入れるようにという部分で基礎的な勉強会なんかも必要かなと思っています。今年立ち上げて、結構評判いいです。

〔知事〕

何ていう制度でしょうか。

〔参加者〕

果樹支援講座という形で募集を掛けたんですよ。

〔知事〕

60何名集まったんですか。それはすごいね。

〔参加者〕

夫婦でなんかも来てくれて。

〔知事〕

課長知っていますか。

〔農業技術課長〕

ええ、新聞に出ましたね。農協が一生懸命やって、普及のほうもどういうふうに講座を組んだらいいのかなんていうことで相談を受けたりもしました。

〔知事〕

みんなそれぞれ自分のうちは果樹園をやっている、お父さんが、親が。

〔参加者〕

そうなんです。親がやっているんですよ。

〔知事〕

跡を継がなければいけないということですよ。やっぱり跡を継ぐ意欲というのはかなり高いんですね。

〔参加者〕

普及の関係は、新しく入ってきた人たちを中心に講座を組んでいたんですけども、これから移植して、うちの百姓を、農業をやりたいという人も加わってきたという経緯もあって、以前から少しずつ動いてきたんです。

〔知事〕

都会でも、60過ぎて定年退職したら果樹でもやりたいというような人はかなり大勢いますよね。農地さえ貸してもらえればね。だからもう跡取りのいない農家は、そういうのに貸してやったらいいと思いますけどね。

〔参加者〕

そのシステムをまた考えなければならない。

〔農業技術課長〕

ただ、地域の人というのはかなり小さい時から見たり聞いたりしているから、全くゼロからではないので、そういう意味では後継者になるのにはそんなに時間はね、手間が掛からなくてできるということですよ。

〔知事〕

都会の人っていうのは知らないからな、農家の苦勞をね。

〔参加者〕

農家後継者としてはいるということですね。

〔参加者〕

60歳代の、ちょうど50歳代後半の人が後継者になるというのが、今この地域の特徴じゃないかと思いますよ。

〔知事〕

それなりに所得が取れるということなんですよ。

〔参加者〕

サクランボから始まって、最後はあんぽ柿まで、こま野農協はアルプス管内果物生産があるわけですが、私どもはとにかく生食で出荷するのが当たり前ということだったけれども、市場に向かない品物を、それぞれ皆さんの努力により製品化してもらっているということで、大変いいことだなというふうに思いました。

さっき農協さんのほうから話がありましたけれども、この桃の盛り、日常何万ケースというものが毎日毎日大市場、大消費地に向かって出荷がされているわけですから、知事さんも東京に行った折には是非時間を見て市場なんかにも顔を出していただいて、是非南アルプス果物の宣伝をお願いしたいなと思います。

〔知事〕

いや分かりました。

〔参加者〕

貴陽が、作った私どもが思っていた以上の反響で大変嬉しいわけですが、消費者の方でなくて、生産者に私は申し上げたいんですけど、せっかくのいい素材だと思いますので、とにかくおいしい食べ頃の適熟のものを収穫して消費者にお届けしていただきたい。そうすれば商材として、味も今評価を受けてきておるわけですから、この評価をいつまでもつなげたいなと思うんです。一応こま野農協では、統一共選という形でやっておりますので、個人出荷とか、裏で出したりとか、そういうことでなくて、適熟まで味をのせて、統一共選のほうへ出せるような製品を作ってください、消費者に届けていただきたいというのが私のお願いでございます。

〔参加者〕

知事、そこで是非県の試験場のほうにもお願いしたいんですけど、日本ではどこもやっていないんですけど、プラムを非破壊のセンサーか何かで、完全に熟度なり、糖度が分かる物を研究してもらいたいんですよ。

〔知事〕

光じゃダメですか、光センサー。

〔参加者〕

それでいいんですけど、それをスモモ用にしてもらって。とにかく南アルプス市、こま野から出る貴陽については、よそと違うよというようにしないと。品種は貴陽だけど、何かネーミングを変えてでも出さなければ、生産者がもちろん今やれることは分かっていますから、日本全国の中で生き残るためには、そういうことも一つの方法かなというふうに思っていますから、研究してみてください。

〔知事〕

特選農産物なんていうのがありますから。しかしスモモの光センサーというのはいないんですか。

〔農業技術課長〕

現在はプラム専用の大型の光センサー選果機はありません。ただし、プラムも光センサーでの糖度測定は可能ですので、実用化を行うに当たっては、まず光センサーでのプラムの糖度測定等の調査を行う必要があります。

〔参加者〕

作れないことはないですよ。

〔参加者〕

それはやっぱり南アルプス市、ここへ一番先に入れるべきだと思いますから（笑）。

〔司会〕

それでは感想も含めて、まとめのあいさつを知事からお願いします。

〔知事〕

今日は本当に色々と心強いお話を聞かせてもらいましてありがとうございました。さすがに南アルプスの果樹農家、そしてこうした加工品をお作りになっている皆さんが熱心に行っていることを大変に嬉しく思ったわけです。県もできるだけのことを最大限やらせてもらいたいと思いますから、また何かありましたらいつでも遠慮なくおっしゃっていただきたいというふうに思います。市を通じてでも結構ですし、どのような方法でもいいですから、どうかよろしく願いいたします。

普及所はなくなっただけですけれども、普及関係はまたもう一回元に戻して、ここは中北の農務事務所に普及員がかなり大勢配置されておりますから、色々ご相談をいただく時には、そういう所へ相談していただいてもいいですし、是非一つよろしく願いしたいと思います。私も一生懸命PRしますから・・・。

〔参加者〕

お願いします。

〔広聴広報課長〕

どうもありがとうございました。

県にはクイックアンサーという制度もありますので、是非今日言い足りなかったこと、それから聞きたいことがもっとありましたら、こちらのほうへ問い合わせをして下さい。

どうもありがとうございました。